

12月29日

## 主教トマス・ベケット

Thomas Becket

(1117/18~1170.12.29)

～殉教したカンタベリー大主教～

ベケットは、ロンドンでノルマン人の商家の息子として生まれます。彼の父は熱心なキリスト教徒で、毎年、成長するベケットの体重を量っては、同じ重さのパンを貧しい人たちに配ったと言われます。

ベケットは当時カンタベリー大主教であったテオバルドゥスに見出され、のちにカンタベリーの大執事となります。そして若きヘンリー2世の大法官と顧問になった彼は、国の政治に腕を振るっていきました。彼の異常なほどの出世をねたむ声も起きますが、ベケットは栄華を好み、王と親交を深めていきます。

大主教テオバルドゥスが死去した後、ヘンリー2世はベケットを大主教に選ぶと考えます。しかしその裏には、自分と仲の良い人物を大主教にすることによって、英国教会を王権下に置こうという意図がありました。つまり王は、教会の権力を自分のものとしようとしたのです。しかしベケットは王の心の内に気づくと、自分は神に仕える身である以上、王と対立することになるだろうと考えます。そのことで彼は大主教になることを固く断りますが、王の強い要求に、断りきれなくなって受けてしまいます。ベケットは大主教になると禁欲と敬虔の生活に入り、案の定、圧力をかけてきた王権から



「トマス・ベケットの  
暗殺場面」

(装飾写本より)

ら教会を守ろうとします。

王は、そのベケットに対し、英国教会の権威を持つのは王だとするクラレンドン16箇条への署名を強要します。さすがに身の危険を感じたベケットは、フランスのノルマンジーに亡命します。

ヘンリー2世はその後も迫害の手を緩めず、ベケットの親戚の財産を没収し、カンタベリーの住民にも圧力をかけました。その様子を見かねて教皇が王を説得し、ようやく和解へと至ります。

その知らせを聞いてカンタベリーに戻って来たベケットですが、その後も争いは過熱し、ある晩、王が遣わした四人の騎士によってカンタベリー大聖堂の祭壇で殺されてしまいます。ベケットの遺骸はその祭壇の下に葬られ、今でもその墓は巡礼地になっています。

### <特禱>

**信ずる者の光、魂の牧者である全能の神よ、あなたは、その言葉によってあなたの羊を養い、その模範によって彼らを導くために、しもべ、主教トマス・ベケットを公会の主教に召されました。どうかわたしたちに恵みを与え、信仰を守り、その生涯に従うことができますように、主イエス・キリストによってお願いいたします。**

アーメン